

## イスラームを「目指す」

水谷 周 2021.7.26

プロフィール：一般社団法人日本宗教信仰復興会議代表理事、日本ムスリム協会理事、国際宗教研究所顧問他。京大文卒、カイロ大、ロンドン大を経て、ユタ大（博士）。海外でのイスラーム研鑽も踏まえ、一貫してイスラームの広さと深さを紹介するため、平易な言葉で著述と各地での講演に努める。主な著書に、『イスラーム信仰叢書全10巻』編、『クルアーンやさしい和訳』、『現代イスラームの徒然草』、『黄金期イスラームの徒然草』（以上は国書刊行会）、『イスラームの善と悪』（平凡社）、『イスラーム信仰概論』（明石書店）、『イスラーム信仰とアッラー』（知泉書館）、『イスラーム信仰とその基礎知識』（晃洋書房）など。

「イスラームの素晴らしさは、その単純さ（バサータ）にある。」とは、中東のムスリムたちの間でよく聞かれる言葉です。簡単明瞭であるというのです。事実、創造主アッラーの絶対的な天地の支配を認めて、その教えを守るというだけです。実に単純です。ところが日本では、どうもイスラームは難しく分りにくいという話を聞きます。このような真逆の現象が、どうして生じるのでしょうか。その結論は、イスラームに対して敬意の気持ちを持って、それを「目指」していないから難しくなると思われま

### 1. 日本にとってのイスラーム

#### (1) 大きなイスラーム

現地の人にとってイスラームは生まれついてからの自然な教えの体系なので、特に難しくないのは当然ということかも知れません。しかし日本人にとっての仏教や神道を考えてみると、生来のものであってもよほど幼い頃より教えられなければ、簡単ではないはず。しかしそれでも日本人は、仏教や神道が難しいとはあまり言わないでしょう。

この現象が生じて来るのは、筆者が見るところ、日本人はイスラームを理解できるものと初めから決めつけているからだと思います。逆に仏教や神道は、奥深くてそう簡単には分かるものではないと思っているので、わざわざ難しいと嘆くこともないでしょう。これを言い換えれば、イスラームは現地から離れている日本でも、いくつかの本を読んだり、話を聞いたりすれば、分かるものだと見なしているということです。

よく日本で聞かれる表現に、「イスラームでは」とか「イスラームにおける」など言うものがあります。これはイスラームを一つかみに出来るという前提ですが、それはい

ているのです。今度は逆に日本人が、「仏教では」という短絡的な言葉で言いくるめることはあまり想像されません。それは自然と仏教と神道の奥深さというものが了解されているので、そのような横柄で見下した言い方と見方を自然と避けることになっているのでしょう。

日本のイスラームとの関係はいわば初心（うぶ）な段階ですから、特に反感や蔑視観はないと言えるでしょう。少なくとも歴史上激しく戦ってきた、欧米社会のアンチ・イスラーム的な流れはありません。ですから上に見たイスラームに対する「横柄な」態度というのは、敵対的ではなく、実際多くの場合日本ではイスラームに親近感さえ感じられます。それでも「横柄」だと敢えて表現した事態そのものは変わりません。この遠因は、近代日本が辿ってきた欧米に追い付け、追い越せという近代化の潮流の中で、それ以外の社会や文明を一段と遅れたもの、あるいは少なくとも欧米には追い付いていないものとして一段低く見る姿勢が初めから、ということは初等教育段階より抜きがたい傾向として引き継がれているからではないでしょうか。

この傾向は誰が悪いということもなく、現代の日本社会にも主軸の一つとして継承されているのです。こうして「イスラームでは」として一言にくくっても、相手は巨人なのでとても全体像は把握できません。巨象の脚の前に立って、これは電信柱なのか流木なのかと争っているようなものです。一まとめにはとてもできない対象を一言で言いくるめていることにそもそも無理があり、それゆえに本来「単純な」ものを「難しく」しているということになります。相手は横綱であり、素人がいきなり正面から押してもビクともしないので、これは難しいと叫んでいる、といった状況を思い浮かべればいいのではないのでしょうか。

## (2) 教養としてのイスラーム

次にイスラームを理解困難にしている原因は、それを知識の一端として学習しようとしているからだと思われます。これは各種勉強会などに熱心に参加される方々に対しては間違いなく耳の痛い話ですから、ここでは言いにくいことです。しかし筆者はそれが事実だと考えるので、敢えて書き進めさせていただきます。

教養を身につけること自体は大切であり、人間修養にもなるので、誰しも一生の課題です。ところが同時にそこには一つの大きな落とし穴が開いていることも指摘しなければなりません。それは教養主義であれば、その人が涵養してきた観念や価値体系が既存の枠組みとして維持されて、それに挑戦するような機会にはまず直面しないという限界があるということです。

この種の限界は何もイスラームに限ったわけではないでしょう。事実日本が民主主義

とは何か、法治主義とは何かといった欧米文化を輸入する過程では、いやというほど試練を受けて来た問題でもありました。しかしそれらの問題では、生きるか死ぬかの現実が肉薄してくるので、逃げようがありません。それらは教養主義ではなく、実践を伴う生存上の問題であったのです。そこがイスラームを学習するのとは、基本から違ってきます。

紀元6世紀以来日本が仏教を招来した時は、やはり生存をかけての課題でした。それで国家の安寧を願い、社会の平安を実現しようという意気込みでした。さらにはそれだけに飽き足らず、儒教や道教、そして多くの国家行事や儀礼は神道に根差すものでした。それらはいずれも教養主義ではありません。生きるか死ぬか、殺すか殺されるかの問題です。

自らの枠組みを破棄し、脱皮するほどの勢いをもってイスラームを学ぼうとするのであればその門戸は容易には開かれないということでもあります。このことはいわば、禅寺への入門と同様でしょう。観光で訪れるのとはわけが違います。寒さ、暑さも厭わず、修行の道を全うする者にだけ許される厳しい門戸なのです。イスラームも同様であり、同様な覚悟と求道の精神が求められます。それらが十分でないままに、イスラームを勉強しても、「単純な」ものを複雑に「難しく」する結果となります。既存の異質な枠組みにイスラームの諸価値や慣行を誤って置いてしまうからです。そしてそれは他の誰でもない、自分の取り組む姿勢に問題があるということになります。

### (3) 宇宙物理学者は話が早い

自分の持っている既存の価値観などの枠組みを打破することの難しさを上述しました。ここではその最たるものとして、物事の存在感覚という問題を取り上げます。それは何を言っているかと言えば、宇宙の万物の存在は有であるが、それが無い状態は無であるということです。しかしこれだけでは同じことの二重表現であり、何を意味しようとしているかは、相変わらず闇の中です。

日本では人生を、そして物事を、生々流転や流れる川の水の如しという言葉で言い換えることに慣れて、そういった縁起の法則の下で見るのが一般的です。一切何もないが、あるのは諸物の縁起だけであり、一物があるというのはそれを引き起こした原因が他に  
あるからだとする見方です。主として仏教で説かれるものではあっても、それは広く国民文化として受け入れられて久しいものがあります。仕方ない、という諦めの良さも日本の土壤になっていると言えるでしょう。個人の主張よりは、寄らば大樹の陰であり、同調圧力は社会に浸透しています。

イスラームはこういった初めも終わりもないという縁起的な世界観とは、真逆の立場

にあります。創造主の「有れ」という一言ですべては始まったと理解するのです。これも頭の体操のようにそう考えるというだけの話ではなく、全身全霊をあげて存在の有無を問いかける発想になじめるかどうか、問われているのです。アラブの友人に手を掴まれて、これは一体だれが創られたのかね、と問いかけられると、ハッと気が付くでしょう。自分は本当には宇宙の、そして人間の創造という問題に心底からは直面していないということに。

よく言われることですが、イスラームを一番よく理解できる非ムスリムは恐らくキリスト教徒だろうということです。もちろんそのようなキリスト教徒もおられるとは思いますが、筆者が思うのはそれよりも、宇宙物理学者ではないかということです。何もないうちに大量の量子や原子といった原初物質が集積し、やがてそれがビッグ・バンを起こして宇宙を広げることとなった、それはまだ広がりつつあるが、その中にはとてつもない質量の塊があり膨大な引力を発揮するので、そこは一度入ったら抜け出すこともできないし、そういった光も出てくることもないという幾多のブラック・ホールが数えきれないほど散在しているというのです。そしていずれは宇宙全体が引き込まれて、崩壊の末路を辿るそうです。

ここで言いたいことは、物事に初めと終焉を想定できる宇宙学者こそは、イスラームの存在感覚に一番近いということです。キリスト教徒は父、子、聖霊の三位一体を唱えるので、クルアーンでも「三と言うな」として戒められています。他方、絶対主以外には、支配の権限も権威も認められないとするのが、イスラームです。著名なイギリスの宇宙物理学者ステーブン・ホーキング（1942—2016年）らの方が、キリスト教は世界最善の宗教だとしたアルバート・シュバイツァー（1875—1965年）よりも、イスラームの存在感覚に近くて対話が早く成り立つだろうというのが、筆者の偽らざるところです。

以上要するに、日本的な生々流転の人生観と世界観は、イスラームのそれとは異質だということです。この縁起の枠組みを脱皮して、新たにイスラームの創造と崩壊の存在感覚を全幅で自らのものとするには、やはり尋常な教養主義では難しいと言わねばなりません。

なおタイトルでイスラームを「目指す」とした趣意を汲んでいただければと願います。それは一大宗教であるイスラームに対する崇敬の気持ちを維持してこそ、アプローチが可能だということです。ただし大きいからといって、他よりも優位であるかどうかといった比較をしているものではないし、また大きいことが冒頭に言及したイスラームの「単純さ」と矛盾している訳でないことも明らかかと考えます。

## 2. 信仰固有の世界

イスラームを「目指す」アプローチをすれば、その「単純さ」も手伝って肩の力も抜けるので、様々な障害も氷解し始めるのではないのでしょうか。ところが、イスラームを一層「目指す」ためには、さらに追加しなければならない課題もあります。それは信仰世界という固有のあり方を理解し把握するという課題です。以下ではできるだけ丁寧に、この課題を二つの側面から詳述してみます。

### (1) 絶対主が支配すること

天地を絶対主が支配されているので、その命令と教えに従順に帰依するということが信仰です。ということは、絶対主の大権を認めることが大前提なのですが、これこそ言葉ではわかったつもりでも、心底そのように徹底できるかどうかは、大いに疑問なのです。

具体例をあげましょう。イン・シャー・アッラー（アッラーが望まれるならば）の言葉は、得てして回答をごまかすための表現と見られがちです。確かに日常のアラビア語用法として半分はその通りですが、しかしもう半分は、アッラーのお考え次第であると真剣に思っている表現なのです。それは実に白黒に運命を二分するものとして、鋭い感覚で受け止められるのです。それを直ちに悟るのに役立つクルアーンの節は、次のくんだりです。

「かれらと同じく、われらはある（果樹）園の持ち主を試みました。かれらが早朝に収穫することを誓った時、（アッラーが望まれるならば、という）例外を付けなかったのです。それでかれらが眠っている間に、あなたの主からの巡り合わせ（天罰）がそれ（果樹園）を襲いました。そこで朝には、それは摘み取られた後で、黒い焦土のようになりました。」（『クルアーン—やさしい和訳』水谷周、杉本恭一郎共訳、国書刊行会、2020年、第4版、68章17-20節）

その人は、イン・シャー・アッラーと言って、アッラーの意思次第だと断らなかったのは、常にすべてはアッラーのご意向次第ということを確認していたというのです。将来の可能性を白黒に二分するのがアッラーの意思であるが、その決定権は人間にはないということを確認するかどうかポイントなのです。そして現在もこの言葉は日常茶飯事に使用され、常に耳目にするものです。それほどにアッラーへの帰依が常に意識され、その加護の下に我々は生息している事実を、片時も忘れてはならないということです。

そして重要なことですが、そのような究極の認識を得るのは、徐々に進める牛歩ではなく、一瞬時に頂点に達する閃光のような直観に依拠するということです。これが宗教、そしてさらに言えば、すべての芸術もこの種の認識力に依拠しているということです。

美術や音楽を味わう能力は学習で1頁ずつ進むのではなく、幼児であっても瞬時に達成するものであることは誰しも知っています。信仰もその極地や頂点に達するには、この最後のダメ押しである直観力が不可欠です。それは天賦の才覚です。この才覚のことをアラビア語ではフィトラと呼んでいます。仏教で誰にも備わっているという仏性に近いものです。このフィトラという言葉は女性名詞で女の子の名前にもなるので、いわば「仏性ちゃん」を町中にちらほら見かけるのです。

卑近な例で恐縮ですが、筆者自身がこの世ならぬ支配者が存在することを直覚したはじめは、小学校低学年のことでした。ある日普通に歩いている蟻を思わず踏みつけそうになったのを父親が見つけて、それは仏様を殺すことになると言って厳しく叱りつけられたことがありました。そこでそれに驚くとともに、この世には目に見えない力が働いているのだと実感し、察知したのでした。もちろんそれ以外にも、日頃より壁一杯に掛けられた大きな阿弥陀来迎図や釈迦涅槃図を間近く目にする機会が多く、一人長時間にわたってボンヤリと思いを馳せたりもしていました。それ以来、筆者は常にこの世とあの世の両方に足を置いている感覚があります。現世のことも来世の脈絡で、同時に見ている気がするのです。そして確かなことは、この感覚はそのままイスラームの絶対主を覚知するのにも役立っているということです。ちなみに筆者の父親は、京都の平安時代以来の寺院の住職で、日頃はそれほど厳しくはなかったのですが、蟻を踏みそうになったその瞬間はあまりに鋭かったので、余計に印象が強く残ることとなりました。

直ぐ上で「役立っている」と記しました。仏も超絶されたお方ではあっても、現世の救いという歴史的に時間特定の立場と永劫の仏という立場の関係性が仏教学では議論されるようです。この種の議論はイスラームには起こりません。唯一性が当初より最も強調されるのです。そして勧善懲悪の裁決は、万物に対して一律に最後の審判で示されます。それでいて、人はいつでもどこでも試されているのであり、人につきものの失敗も悔い改めれば赦される構造です。ここでも「単純さ」が際立っていると、筆者には映ります。

## (2) 反復は生活のリズム

信仰世界固有の次の側面は、繰り返し論法に関するものです。イスラームが基礎とし、その背景に持っている社会、言い換えればその文明的な成り立ちが現代日本とは非常に違っているということは言うまでもありません。今の日本は明治以来の近代化路線第一主義の延長上にあります。それと際だって対照的なのが、イスラームの世界と言えるでしょう。それは詰めて言うならば、繰り返しを尊ぶ文化といえます。

クルアーンが分かりにくくて読みづらいとされてきた一つの大きな理由は、その全

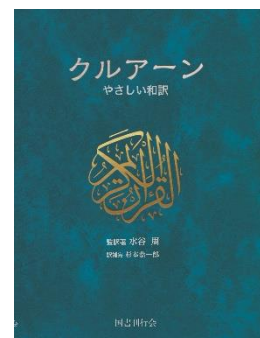
体の流れが判読しにくいという事情があります。確かに著者自身、クルアーンが引用されているのを見ると、いつも非常に短い句や節が前後の脈絡からは切り離されてぷつぷつと記されているのに、少なからず違和感を覚えさせられてきました。他方アラブ民族の思考様式として、一つ一つ、そして一瞬一瞬に移り変わる姿がすべてであり、全体の流れや内在する連関性に注意を払うことがないという特性があるとされます。そしてそれは砂漠生活の特徴として、刻々と速やかに変化する大自然の中で培われた生活感覚に支えられたものともされてきました。

このような非連続的な存在感は、ばらばらであることをもって自然と受け止めるので、原子論的存在論とも称されます。例えば、千夜一夜物語のように、一夜毎の小話の連続に終始して、全体を覆うストーリーや哲学には無頓着であるということです。そしてこの原子論的存在感覚は、クルアーンにも妥当しており、したがってそれは片言隻語のような短い表現のばらばらの集積であるということになります。ところが一方では、あれほど信者の心を捉えて離さないクルアーンは、本当に小さな切片の積み重ねに過ぎず、全体の構成は無視されているのであろうかという疑問は、半世紀に涉って筆者の心の中に去来してきました。

そんな中、一つの重要な節がクルアーン自身の中に埋め込まれていることに、和訳していて改めて気が付きました。「アッラーは最も美しい教えを、互いに似た（一貫した比喻を）繰り返す啓典で啓示しました。」（39章23節）

繰り返すということは、どういうことなのでしょう。そのような話法や論法は現代の日本、あるいは現代文明の中では非能率の象徴のようなものであり、むしろ積極的に拒否され、一段低い思考様式、あるいは低いレベルの頭脳の働きと見なすのが普通でしょう。能率優先であり、その中には進化であり進歩が実現されているというスタイルが、現代で普通に歓迎されるか、もしくは当然視されます。しかしよく考えてみると、この繰り返し論法はそれを好むかどうかは別問題として、一つの立派な流れを構成しているのであり、確固たる構造の基礎をなしていると思なすべきなのではないか、とも気付いたのです。

いま一つ同様なことに気づかされた契機は、和訳するに当たって理解促進と思って、クルアーンの各章において、主なグループ毎に見出しを入れることとしたことでした。見出しを付ける作業を継続して実施する中からも、やはりこの繰り返し論法が如実にその姿を浮かび上がらせたのです。実例として、最も長い章である2章



「雌牛章」の見出しの具合を見てみましょう。<sup>1</sup>

- ① 信仰対不信仰 (1—20)
- ② アッラーの創造と知識：アードムの物語 (21—39)
- ③ イスラームの民への立法 (40—86)
- ④ ムスリムへの試練：ユダヤ教徒とキリスト教徒の嫉妬心 (87—121)
- ⑤ 中庸の信仰共同体：カアバ殿の建立と礼拝の方向 (122—152)
- ⑥ ムスリムの試練 (153—167)
- ⑦ ムスリムへの立法：新たな共同体の形成 (168—242)
- ⑧ アッラーの創造と知識 (243—255)
- ⑨ 対不信仰：施しの勧めと利子の禁止 (256—286)

⑤を中心として前後の各節はそれぞれ対応しているのです。初めの①は最後の⑨で繰り返され、②は⑧で、そして③は⑦で、最後に④は⑥で繰り返されているのです。

このような各章におけるそれぞれの節の繰り返し構造は、まずほとんどの章において実に忠実に反復されています(上記の『クルアーン—やさしい和訳』603—616頁参照)。繰り返し論法は、イスラーム諸国では格別に意識されるわけではないし、クルアーンに関してはイスラーム諸国では幼少期より耳にし、口にし、目にすることで、その繰り返し調がなければ、心に訴えるものがないという習性が出来上がっているといえます。小学校を出る頃までには、クルアーン全体の顛末がすっかり頭に叩き込まれ、またさらにはそれが自らのアイデンティティともなって、心の一部になり切っているのです。これこそは文化の違いです。

話の鮮やかな展開ではなく、繰り返される中から出てくる微妙な変化や、グラデーションを楽しむ文化ということです。そのことは、アラブ音楽のメロディーの特徴としても想起されるので、納得する読者は少なくないでしょう。こういった状況は、明らかに正反合という三段論法の進化論的近代欧米社会ではありません。和訳作業を通じて、繰り返し論法がクルアーンを通底していることに改めて気付かされ、またさらにそれは欧米近代社会の成り立ちとは異質なものであることにも気付かされたのでした。

ちなみにこの反復調子が生活のリズムであったのは、恐らく近代以前の日本もかなり

---

<sup>1</sup> Raymond Farrin, *Structure and Qur'anic Interpretation*, Ashland, Oregon, 2014. 参照。同書ではさらに、50～56章の究極の顛末(復活、審判、楽園と地獄)を中心として、すべての章が同心円状に展開されていると分析。刮目すべき貴重な仮説である。



同様であったろうということです。源氏物語の連綿と続く話法は、千夜一夜物語にも酷似しています。多くの文学は、～物語と称されて、それは様々な小話の連続でした。東海道膝栗毛などは、まだ出発点と到着地点があるだけかもしれませんが、それらは単に地理的な二地点であり、物語性の流れの出発点と到着点ではありません。

そしてこの一見退屈な繰り返し調が啓典を読みづらくしており、さらには現代日本人にとってイスラームを理解しづらくしていると言えるのではないのでしょうか。なお最後に付言しておきたいことは、信仰というところの営みは決して一つの最終駅に向かっていくものではないということです。日々が通過地点であり、その意味で毎日が最終駅でもあります。こんな矛盾しているような言い方は洒落ているわけではなく、それこそ繰り返し論法のもたらす結論であることはもうお判りでしょう。

ここまで読み進めてこられて自然と浮かぶ疑問は、それではどうしてイスラームは現代の世界に広く流布し、信奉されるに至ったのかということでしょう。さてここで「世界に広く」といったわけですが、この疑問に対する回答はその表現に既に含まれていると言えるのではないのでしょうか。つまり通常日本語で「世界」というと欧米中心にその視野が広がっているということです。少なくとも、比重が傾斜していることは否めないでしょう。しかし人類社会はもっと重層的です。「欧米中心」と地理的な言葉を用いましたが、欧米も含めて近代化路線の上を歩んでいない国々や人々は多数います。発展途上国かといえば、そうばかりは言えません。その中にもすっかり欧米風な人たちもいます。日本も様々な成り立ちの国民で構成されています。

そういう人たち自身の自意識までは立ち入りませんが、大なり小なり進化論的に社会的な上昇を生きがいとした人たちばかりではありません。欧米にも多数、繰り返し論者はいるということになります。日本も同様です。それは、くっきりと絵に描いたような繰り返し論者とは言えなくても、それは広い意味でそうです。少し政治的になるので気は進まないのですが、好例としてあえて言えば、米国前大統領トランプ氏の岩盤支持層のようなものです。とても米国の伝統的価値観や世界観を共有し享有するものではないのですが、それでも遜色のない米国市民であり、一個の人間です。イスラームにはこのような広い社会的認知の力と救済感、そして互いは兄弟とする同胞感に溢れています。それは上昇よりは、横への浸透力に富んでいると言えます。ちなみに毎年一回のマッカ巡礼では、人種や国籍に関係なく数百万の巡礼者が、全員白衣の巡礼着に身を包み、種々の儀礼に参加するために集うのです。それは信仰共同体の平等の具現化であり、最後の審判の情景であるとされます。

### 3. 最近の活動

以上のような諸々のテーマと取り組むために、様々な活動と取り組んでまいりました。最後の本節において、それらを紹介させていただきます。イスラームを「目指す」と言ったことが、より具体的な姿で伝えられればと願います。

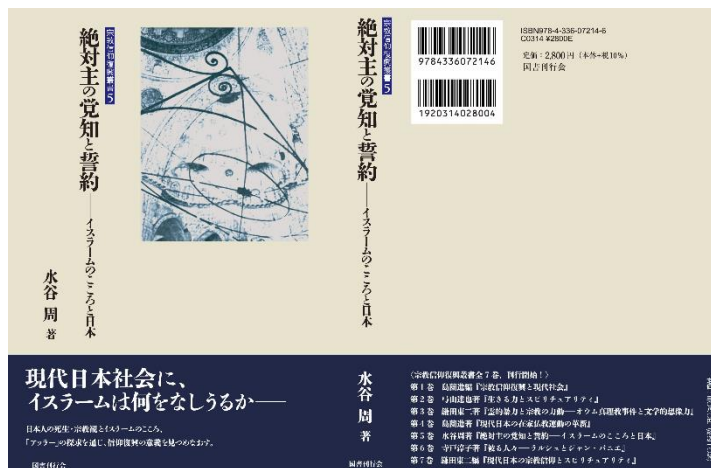
まず初めには、昨年夏、世界が新型コロナウイルス感染症で動揺する中、筆者は日本宗教信仰復興会議という一般社団法人を立ち上げました。その概要は、HPがあるので検索していただくのが一番早いでしょう。URLは、<http://www.hukkoukaigi.or.jp>ですが、法人名からも検索可能です。筆者が卒爾ながら代表理事を務めています。そこに法人設立の趣意も代表理事の挨拶として書いてありますが、戦後日本の低調な信仰心を今一度奮い立たせることにあります。それはイスラームだけではなく宗教一般という建前で、事実、理事には仏教、神道、あるいは宗教学や医学の研究者も含まれています。まだ設立以来一年しかたっていないので、扱った案件は多くはありません。

最大のプロジェクトとしては、『宗教信仰復興叢書』という全7巻の叢書を出版することとしました。HPには全巻の案内も出ています。創刊号は筆者が執筆した『絶対主の覚知と誓約—イスラームのこころと日本』というもので、本年の7月初めに刊行されました。

また同法人ではいくつかの出版物への助成や、いのちの大切さを訴え、あるいは東日本大震災支援活動を行う団体に助成金を交付してきました。もちろんコロナ感染症の状況次第ですが、本年11月には京都で「悲とアニマ」と題するシンポジウム兼展示会が開催されるので、それにも

助成金を交付し、さらには当日のシンポジウムの討議に参加する予定となっています。また同HPにおいては、筆者が「信仰心蘇生のために」と題して、信仰心一般の立場から信仰心のあり方、その甘美さなどについて、連続記事を掲載してきているので、是非ご覧いただければ幸いです。本稿で書けなかったような幾多の論点や経験、実話などを取り上げて平易に記述しました。

この法人の理事の方と筆者自身の共著という形で、本年10月には『祈りは人の半



分』という著作が出版予定となりました。その趣旨は、人は願い事をするが、それは祈りでもあり、その祈りがまとまれば信仰となり宗教になる、従って宗教信仰というものは、人にとってはごく自然で、当然な営為であるということです。そのような趣意を、優しく、多数の原典も紹介しつつ記述しました。何よりも、通常より相当大きな字型の印字となっており、それはひとえに読む人の眼に優しくするためです。

なお同書の一つの章は「信仰復興の二つの課題」という拙論です。そのポイントの第一は、上述のように人として宗教心をもつことは自然な訳ですが、それがゆえにそれを裏から言うと、信仰心を育むことは人間性の復興でもあるということです。第二のポイントは、戦後日本の宗教の低調ぶりを分析するとともに、その大きな原因の一つは宗教側自身にあるということです。日本国憲法第 20 条により政教分離で宗教は政治権力を行使せず国は宗教活動をしてはならないこととなっています。しかしそれは宗教に政治社会における発言まで禁止するものではありません。この政治社会の事案に及び腰となり、自粛気味の宗教自身が自らの喉元を締め付ける結果となっているようです。戦後日本の特殊な宗教情勢は同拙論でも詳述しましたが、結論的には信仰復興により諸宗教はもっと活発に政治参画をすべきだということ（それは政治権力を振るうこととは別）、そしてそのような活動は本来の宗教の活動の重要な一部分でもあったし、それが宗教を活発化するだろうと論じました。というわけで、ご関心の向きあれば、是非とも同書をご覧ください。

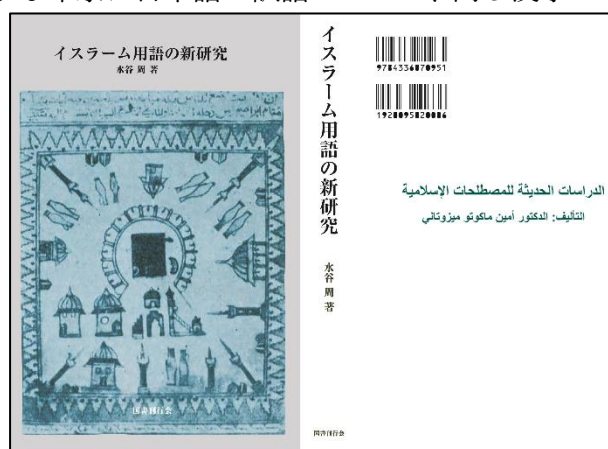
また同書のカバー写真には、「祈りのこけし」が掲載されます。それは白木のこけしですが、由来としては、水俣病の被害に遭い苦しみながら失われた、人間、魚、鳥その他のすべての思いが宿っていると思われる、水俣湾埋め立て地にある実生の森の木の枝で彫ったものです。失われた全ての生命に祈りを捧げながら、「命の大切さ」に思いをいたし、二度と水俣病のような悲劇が繰り返されないよう願いを込めて、彫り続けられています。白木のままで目や鼻や口を描いていないのは、未完成の意味です。

受け取られた人々の思いの中で完成させることが期待されているからです。熊本県水俣市の緒方正実さんが、この新著と当法人のためわざわざ新作をこしらえて下さるとのことです。それはわれわれの活動のシンボルとなるでしょう。なおこの「祈りのこけし」はすでに約 4000 体が国



連事務総長や小泉環境相などにも寄贈され、社会的貢献の実をあげつつあります。

最後にもう一点近著に言及しておきたいと思います。『イスラーム用語の新研究』と題するものです。これはやはり本年7月に出版の運びとなりました。内容はこれまで日本語で使用されてきたイスラーム用語について、詳細な再検討を加えることで信仰内容をより精緻なものにしたいということです。例えば、称賛と賛美という二つの用語は頻出しますが、両者は意味の上で一体どう異なっており、どう関係しあっているのでしょうか。それを考えるには、当然ながらアラビア語の当初の意味内容を確定することが必須です。称賛はアッラーへの格別の感謝であり、賛美はアッラーが至高であることを称えるという意味です。両者が似ているような印象は日本語の訳語において、同じ漢字が使用されているからにすぎません。アラビア語では語源が全く異なる二つの別々の単語なのだから、意味の上でどう違うかなどというのは、ただの愚問ということになります。また日本語ではイスラーム関係でもしきりに「聖」という文字を冠した用語が使われています。聖クルアーン、聖地、聖人、聖典などなど、相当数あります。日本人には穢れのある思想があり、それを払うために聖の言葉と概念が好まれるという事情が背景にあります。ところが、アラビア語を顧みると、それらのどこにも「聖」、すなわち神性を帯びているという要素は存在しないのです。むしろアッラー以外に神性を帯びた存在を認めることは、即ちアッラー以外に絶対主を認めるきっかけとなるので、それは多神教に誘うものとなり、本来イスラームが積極的に拒否し排除してきた概念なのです。聖クルアーンと訳した人にしても、クルアーンを崇め奉るなどという、奇行というか愚行を犯す人はいないはずで



こういった地味な精査の作業も一步一步ですが、イスラーム信仰を「目指す」姿勢で、日本語でも本当に正確に理解し、把握し、定着させようという大きな目標を掲げつつ進んで来ることができました。更に先々の課題ですが、世界人口の25%ほどが現在すでにムスリムであり、それも急増している中で、日本はどうあるべきなのでしょう。こういった日本にイスラームを一層取り込むというテーマに関しては、上述の『絶対主の覚知と誓約—イスラームのこころと日本』で相当論じましたので、同書に譲ることに致



します。それを一言で言うならば、日本は一人取り残されるガラパゴス島になってはいけないということです。

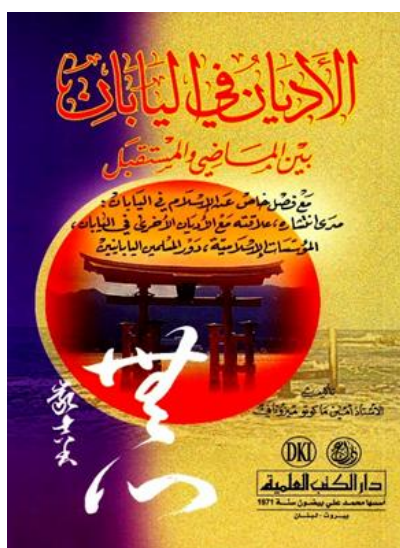
以上たまたまコロナ感染症流行のため出版時期がずれたために、数冊がほぼ同時に刊行される結果となりました。これも不思議な気持ちです。すべてが共鳴しているかの如くだからです。そしてそこに、あの絶対主の差配を看取してもいいのではないのでしょうか。何も神に憑かれたのではなく、一連の著作は一本の糸で結ばれているからこそ、このような幸せな偶然が招来されたと考えます。そしてそのように思われてくるのであれば、その顛末については、やはりあの方に感謝するという事で本稿に終止符を打ちたいと思います。

終わり

### 水谷周著作（書籍）一覧

『アフマド・アミン自伝』第三書館、1990年。アフマド・アミン著。アラビア語からの翻訳。

『世界のマスジドーイスラーム建築の心』イマーム大学出版、アラブ イスラーム学院研究叢書5。東京、2006年。



『日本の宗教—過去から未来へ』ベイルート、2007年。  
(アラビア語)

الأديان في اليابان بين الماضي والمستقبل، دار الكتب العلمية، بيروت، 2007.  
*An Intellectual Struggle of a Moderate Muslim – Ahmad Amin*, Ministry of Culture, Cairo, 2007.

『カアバ聖殿の歴史と事跡』日本サウディアラビア協会、東京、2008年。

『アラビア語翻訳講座』全3巻、国書刊行会、2010年。

『アラビア語の歴史』国書刊行会、2010年。

『イスラーム信仰とアッラー』知泉書館、2010年。

『礼拝の法学』監修、アル・ジャジーリー著、松山洋平訳、日本ムスリム協会出版、2011年。

『アラブ民衆革命を考える』編著、国書刊行会、2011年10月。

『イスラームの善と悪』平凡社新書、2012年5月。

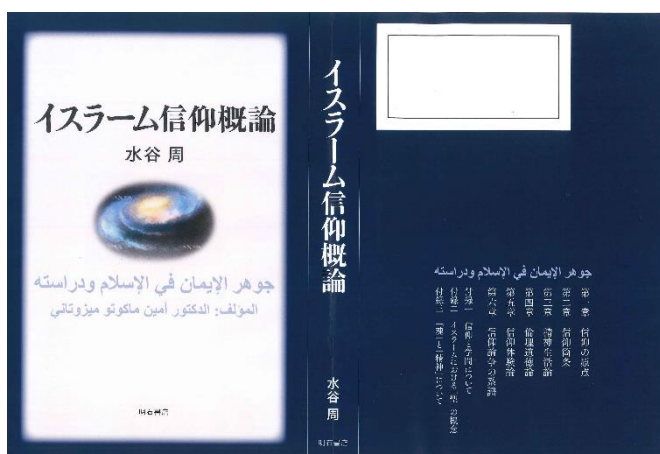


『集团的自衛権とイスラム・テロの報復』青灯社、共著宮田律他、2015年4月。

『イスラーム信仰とその基礎概念』晃洋書房、2015年12月。

*Al-Liberaliyya fi al-Qarn al-'Isharin - Namadhij Fikriyya Misriyya, Ahmad Amin wa Husayn Amin. Cairo : Majmu'at al-Nil al-'Arabiyya lil-Nashr wal-Tauzi', (Arab Nile Publishing Group) 2016/3. xvii,191p. Text in Arabic, translation from English (Liberalism in 20th Century Egyptian Thought, The Ideologies of Ahmad Amin and Husayn Amin, London, 2014. I.B.Tauris & Co. Ltd.)*

『中東と日本の針路—「安保体制がもたらすもの」』長澤栄治・栗田禎子編、大月書店、2016年。



『イスラーム信仰概論』明石書店、2016年8月。

『アラブ人の世界観—激変する中東を読み解く』国書刊行会、2017年。

『1日1課のアラビア語』国書刊行会、2018年。

『クルアーンやさしい和訳』国書刊行会、2019年。

『日本の道徳とイスラーム』ベイルート、2019年（アラビア語）

الأخلاق في اليابان والإسلام، دار الكتب العلمية، بيروت، 2019.

『黄金期イスラームの徒然草』編訳、国書刊行会、2019年。

『現代イスラームの徒然草』編訳、国書刊行会、2020年。

『日本におけるイスラームとクルアーン』編著、晃洋書房、2020年。

『絶対主の覚知と誓約—イスラームのこころと日本』「宗教信仰復興叢書第5巻」国書刊行会、2021年。

『イスラーム用語の新研究』国書刊行会、2021年。

『祈りは人の半分』水谷周・鎌田東二共著、国書刊行会、2021年秋予定。